慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『ギフト、再配達 : テレビ・ テクスト分析入門』 書評論文リプライ
Sub Title	
Author	藤田, 真文(Fujita, Mafumi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.111- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『ギフト、再配達―テレビ・テクスト分析入門』書評論文リプライ

藤田　真文

小林直毅さん、ご多用中にも関わらず拙著『ギフト、再配達』の書評、ありがとうございました。

拙著の構成は第１に、(拙著の概念を使えば)「ミクロな物語」の累積になっている。各章で独立したテレビ分析の方法論を論じ、読者が各章の方法論を使って新たなテレビ番組へと適用してくれればいいという構成意図である。そして、第２の構成意図は、ナイフ事件によって社会的に抹殺されたテレビドラマ『ギフト』を「(R.) バルトのいうテクストの『多様性』と『複数性』を限りなく追求」することで救出するという、(再び拙著の概念を使えば)「マクロな物語」にあった。

小林さんの書評では、まさにテクスト内在的に拙著の「マクロな物語」を再構成し、「最終的に読みとられたテクストは、視聴者の責任に帰すべきである。少なくとも、視聴者が自分の読解がテクストの影響で成立したと主張するためには、(中略)『どうしても××としか読めない』とテクストの責任を確定する必要がある」という本書の意図を汲み取っていただいた。拙著が晦渋なために、その作業の困難さを思うとき、筆者としてまことに感謝に堪えない。

さて、小林書評のなかで、筆者がもっとも傾聴すべきと思ったのは、「第２部『テレビ・テクストと社会』における論考は、逆にその社会的な射程の短さ、具体性の乏しさが否めない」という指摘である。これまた、的確に痛いところを突かれたという感じである。執筆した原稿には脱稿後にえてして未完成な感覚が伴うことがあるが、とりわけ本書の第２部はそうだった。筆者の力量不足は言うまでもないが、それと同時に第２部執筆時にある種の警戒感があったことも確かだ。

というのも、精神分析学、ジェンダー論、フェミニズム、新歴史主義、言説分析など、第２部の方法論は、社会科学にもこれまで受容された馴染みのものであったからである。それに比べ、第１部の記号論・物語論や第３部の読者論・受容理論といった人文科学的なアプローチは、社会学、政治学、社会心理学などの社会科学をベースにしたマス・コミュニケーション論にはこれまであまり包摂されてこなかった。本書ではテレビのテクスト分析を副題にして、人文科学的なアプローチを適用することには積極的な一方で、社会科学に馴染みの領域で私の筆致は慎重になってしまった。

小林さんも指摘された「新歴史主義（ニュー・ヒストリシズム)」の項で論じたように、テクストとテクストが書かれ読まれた当時の社会の相関性を安易に見いだそうとする社会学的な還元論を避けなければならないと感じていたからである。むしろ、新歴史主義が主張したよう

に、テクストとの当時の他の様々な「言説」の関連性を検証するという禁欲主義を守らなければならない。その意味で、本書では『ギフト』というテクストの外にある他の様々な「言説」を掘り起こすという作業が不十分であったことを認めざるを得ない。

他に第２部の反省として、何も精神分析学とテクスト分析の解説をフロイトやラカンから始めるのではなく、ジジェクら近年の精神分析学からの映像論の成果（『ヒッチコックによるラカン』『汝の症候を楽しめ』など）を土台にすること。テクストと社会の関係については、ブルデューの文学場の理論（『芸術の規則』）や、デュボアの文学社会学（『現実を語る小説家たち』）を参照するなど、人文科学的と社会科学を接合した業績をもっと取り入れるべきであった。第２部の議論を、小林さんがいわれるような分厚い言説編成の記述へと展開すること、これが筆者の次の課題と思っている。

（ふじた　まふみ　法政大学社会学部）